「豚野郎」と呼ばれた男の物語

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「豚野郎」と呼ばれた男の物語

【Ｎコード】

Ｎ５１９３Ｔ

【作者名】

タケノコ

【あらすじ】

話し手が語る自虐ネタ満載のコメディーなお話。どこから読んでも大丈夫。そこいくあなたちょっと読んでいきませんか？

第1話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「僕には親友がいるんですよ。親友は友情の印にニックネームで僕を呼ぶんですよ……『うすら禿げ』って。この前二人で遊園地のお化け屋敷に入ったんですよ。お化け屋敷を出た後、親友が言うんですよ……『怖かった』って。僕もそれに共感して相槌をうったんですよ。すると親友が真顔で言うんですよ……『うすら禿げの顔がな』って。この前大学の授業で論文の発表をしたんですよ。とても厳かな雰囲気だったんですけど僕が檀上に立つと観衆がよく僕の方を指差すんですよ。なんでだろうと思ったんですよ。すると親友が立ち上がり言うんですよ……『カツラが前にズレてるぞ』って。それ依頼大学では禿げとかカツラとか呼ばれてます。この前親友と合コンに行ったんですよ。そしたら女の子達に『あがってるよ』って言われるんですよ。僕は落ち着いていたんでなんでだろうと思ってたんですよ。そしたら親友が言うんですよ……『うすら禿げ……ヅラが上がってるぞ』って。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第2話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「小学生の時可愛く可憐な女の子を呼び出して告白したんですよ……『ご主人様になってください』って。そしたら彼女に言われたんですよ『変態、色情狂、死ね』って。そしてぶたれたんですよ。それ以来僕はマゾに目覚めたんですよ。小学生の時付き合ってる女の子によくおねだりをしたんですよ……『踏んでください』とか『罵ってください』と。すると彼女は初め抵抗があったみたいなんですけど慣れてくると執拗にしばいたり言われるんですよ……『豚野郎！　平伏しなさい』って。そしてその娘に『キスさせてくださいご主人様』って言うと片方の足を差し出し言うんですよ……『好きなだけキスしなさい』って。僕は動揺したけどファーストキスを捧げました。赤い靴に。あの時は幸せでした。今でもあの頃の生傷が残っています。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第3話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前旅行先で柄の悪い女性にからまれたんですよ。その女性は肩がぶつかっただけなのに言うんですよ……『崖から飛び降りるか私の奴隷になるか選びなさい』って。だから僕はその女性の奴隷になったんですよ。彼女照れ屋さんで僕が少しでも褒めると言うんですよ……『死にたいのそれとも死にたいの』って。先日も二人で買い物に行ったんですよ。僕が『これってデートだよね』って言うと彼女恥ずかしそうに言うんですよ……『生まれてきたことを後悔させてあげようか』って。彼女が今の僕の恋人です。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

〔おしまい〕

第４話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前彼女とお化け屋敷に言ったんですよ。すると彼女が僕の首に両手を回してきたんですよ。苦しいなと思ったんですけど、彼女は怖がっていてかわいいなと思ったんですよ。そして彼女は言うんですよ……『チョークスリーパー！』って。彼女とこの前公園に行ったんですよ。そこで彼女捨て犬を抱いて呟いてたんですよ……『ゲス野郎、よしよし。豚野郎の代わりに飼おうかしら』って。それ以来その犬の面倒を僕がみています。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第5話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「先日彼女が手料理を作ってくれたんですよ。本当はとてもまずかったんですけど僕は『美味しい』って言ったんですよ。すると彼女は喜んで言うんですよ……『豚野郎、死にさらせ』って。僕が彼女の作った手料理を愛犬のゲス野郎（彼女が命名）に与えたらゲス野郎が悲痛な声を上げて失神したんですよ……『キエエエーー！』って。僕がなんとかテーブルの上の料理をたいらげたんですよ。すると彼女が恥ずかしそうに言うんですよ……『お代わりは十回以上ね』って。僕は三回目のお代わりをした後から朝まで記憶がないんですよ。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第6話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前誕生日で彼女からプレゼントを貰ったんですよ。彼女は……『豚野郎の首に似合うと思って』っていうんですよ。僕はネクタイだなと思いながらお礼を言って包装を開けたんですよ。すると赤い首輪が出てきたんですよ。彼女の手にはリードがあったんですよ。彼女はその時言うんですよ……『散歩に行くわよ』って。だからゲス野郎（愛犬）を連れてきたんですよ。そしたら彼女は言うんですよ……『豚野郎と私がね』って。仕方なく僕は犬のように首輪をして紐を付けられ近所を散歩させられました。その時彼女は申し訳なさそうに言うんですよ……『豚野郎、お前にお似合いだわ』って。二回通報されて職務質問されました。ご近所さんは僕の事を変態だと思っています。それ以来赤い首輪が僕のトレードマークになっています。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第7話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「数週間前恋人と図書館に行ったんですよ。僕は太宰〇を読んでたんですけど彼女は何を読んでるんだろうと思って見たら楽しそうに読んでたんですよ……『恋人の厳しいしつけかた』を。その時に彼女と目があったんですよ。そしたら彼女照れて言うんですよ……『豚野郎、はらわたを引きずり出すぞ』って。僕が『その本面白い？』って聞くと彼女は言うんですよ……『豚野郎、生意気だ。私を直視するな吐き気がする』って。それから本を借りたんですけど彼女は面白そうな本をいくつか借りたんですよ……『調教の極意』と『拷問の楽しみかた』と『事故に見せる殺し方』を。図書館に行って数日の後横断歩道で信号が変わるの待ってたら後ろから押されたんですよ。間一髪で助かって良かったですけど彼女が駆け寄って来て言うんですよ……『豚野郎、大丈夫？』って。でもその時の表情はどこか残念そうでした。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第8話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前恋人とデパートに行ったんですよ。そして服を見てたんですよ。そしたら彼女が僕にシャツを渡しながら言うんですよ……「豚野郎にお誂えむきね」って。シャツには豚の顔と奴隷という文字がプリントアウトされてました。それを無理矢理買わされました。毎週月曜はその服を着るようにと命令されます。慣れてくると人の目も気にならなくなります。次にトランクスを見てたんですよ。そしたら彼女が一枚のトランクスを渡してきたんですよ。柄は緑の地に黒い文字で『小さな拳銃にご用心』という言葉が斜めに描かれてたんですよ。それを見て温厚な僕も怒ったんですよ……『僕のは拳銃程の力は無いよ！』って。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第9話（※注意・下ネタ）（前書き）

今回は下ネタです。苦手な方はご遠慮ください。

第9話（※注意・下ネタ）

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「僕が彼女に欲情して駄目だろうけど『胸を触らしてください』と言ったんですよ。そしたら彼女は言うんですよ……『仕方ないわね。いいわよ、私についてきなさい』って。僕は外でそんなことをするなんて恥ずかしいなと思いながらついていったんですよ。そして目的地に着いたみたいで彼女が立ち止まったんですよ。そこは牛小屋だったんですよ。そして彼女は一匹の牝牛を指差して言うんですよ……『牛小屋の主人には許しは得てあるわ。好きなだけ牛の胸を揉みなさい』って。僕は戸惑ったけど彼女が怖かったので牛の胸を揉みました。軟らかかったです。またある日彼女にお願いしたんですよ……『セックスさせてください』って。そしたら彼女が二つ返事で言ったんですよ……『いいわよ。五分待ってなさい』って。僕は予想外の返答に飛び上がって喜んだんですよ。そうこうしてたら外出してた恋人が豚を連れ帰って来て言うんですよ……『豚野郎、豚どうし交尾しなさい』って。僕は彼女にお詫びを言ってなんとか豚との交尾を免れたんですよ。それ以来彼女には欲情しないようにしています。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第１０話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「先日彼女とプールに行ったんですよ。僕がビキニを着た女の子をジーッと見ていたら恋人が嫉妬して大声で言うんですよ……『そこのあなた、豚野郎があなたを見て発情して犯罪を犯そうとしているわ。気をつけなさい！』って。僕が恋人を見て『君はやっぱり綺麗だね』って言ったら彼女は時めいて言うんですよ……『いや、私、豚野郎の子を妊娠したくない！』って。彼女は泳ぐのがとても上手かったから褒めたんですよ。そしたら彼女は照れて言うんですよ……『豚野郎、子豚は一人で作りやがれ！』って。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

〔おしまい〕

第１１話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前彼女と公園で童心にかえってかくれんぼをすることになったんですよ。僕が鬼で公園の真ん中で目をつむって三十数えたんですよ。それから二時間公園を探したんですけど彼女を見つけられず、彼女の携帯電話に電話したんですよ。そしたら彼女は言うんですよ……『今は家に居るけど』って。それから今度は僕が木の裏に隠れたんですよ。彼女が鬼の番なんですよ。それから二時間隠れてたけど探しに来ないんでおかしいと思って彼女を探したけどいないんですよ。仕方なく彼女の携帯に電話したら彼女は言うんですよ……『今は家に居るけど』って。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

〔おしまい〕

第１２話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前彼女と山登りに行ったんですよ。登ってる途中で彼女が足を止めたんですよ。そしたら彼女が言うんですよ……『豚野郎、あなたの荷物を持ってあげるわ』って。僕が喜んで荷物を渡すと彼女が言うんですよ……『豚野郎、私の前にひざまづきなさい』って。僕は踏んでもらえるのかな、ラッキーと思ったんですけど彼女は僕の背中に乗り言ったんですよ……『豚野郎、山頂まで運びなさい』って。彼女と二つの荷物を背負って山の中腹まで来たんですよ。すると老人が近づいて来て言うんですよ……『この山は以前姨捨山だったのじゃ……青年はその娘さんを捨てに来たのかい？』と。僕が否定すると彼女が言ったんですよ……『その通りよ』って。僕はその後から捨てられるんじゃないかとヒヤヒヤしていました。山頂に着くと景色を眺めたんですよ。とても絶景だったんで『綺麗だね』と行ったんですよ。そしたら彼女が言うんですよ……『セクハラで訴えるわよ』って。その次にやまびこを聞こうと大声で言ったんですよ……『僕は恋人の事が大好きだー！』って。そしたら彼女も赤面して大声で言ったんですよ……『豚野郎！　これからも私の忠実なしもべでいるのよー！』って。その後僕が手づくりしたお弁当を食べたんですよ。彼女は『駄作ね。豚野郎、これからは料理の腕を磨くのよ。私のために』って言ったんですけどお弁当を半分近く平らげました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第１３話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前、彼女と動物園に行ったんですよ。彼女も機嫌がよくて言うんですよ……『豚野郎、肉かいにしてあげようか？』って。園内をまわってたら彼女が言うんですよ……『豚野郎のお母さんがいるわよ』って。僕が彼女の指差した先を見るとピンク色の太っ腹の豚が仰向けでいびきをかきながら爆睡してたんですよ。またすぐ彼女が『今度は豚野郎のお父さんを見つけたわ』って言うんですよ。僕が彼女の指差した先を見ると午前中なのに牝豚達に交尾を迫って蹴りを顔に入れられている牡豚がいたんですよ。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

〔おしまい〕

第１４話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「僕、この前雑誌で『Ｍ男同盟の説明と会員募集』って記事を読んだんですよ。そこには奥さんによく縛られる旦那さんのことが書いてあったんですよ。旦那さんは奥さんに言うらしいんですよ……『縛られるのはもういいですけど肉に食い込むほどきつくしないでください、ご主人様』って。それを聞いた奥さんは同情してさらにきつく縛るらしいんですよ。その時奥さんは雄叫びをあげたらしんですよ……『クエエエーー！』って。他にも書いてあったんですけど、油性のマジックで寝てる間に奥さんに落書きをされる男の話があったんですよ。その男が朝鏡を見ると両頬に『破廉恥な横っ面』って書かれていたらしいんですよ。その男は必死に顔を洗ったのにおちず、両頬にかっとばんを貼って会社に行ったらしいんですよ。さらにあるとき男が朝、鏡を見ると顔中赤いインクで塗りつぶされていたらしいんですよ。流石に怒った男は奥さんに言ったらしいんですよ……『落書きするのは構いませんがお願いですから油性のペンは止めてくれませんか？』って。そしたら奥さんは残念そうな顔で言ったらしいんですよ……『キャンバスの分際で私の芸術を罵るつもりなの！』って。男はその日会社を休んだそうです。今は僕も『Ｍ男同盟』の会員になりました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第１５話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「数日前『Ｍ男同盟』の会合に行ってきたんですよ。そこで佐々木課長と出会ったんですよ。佐々木課長は会社で課長さんをしているらしいんですけど部下の美女に虐められてるそうなんですよ。美女がお茶を運んでくれたらしいんですけど彼女の親指が湯飲みのお茶の中に入ってたらしいんですよ。佐々木課長が注意したら美女は言ったらしいんですよ……『親切心から行ったサービスですよ』って。佐々木課長は諦めてそのお茶を飲んだらしいんですよ。でもなんか変な味がしたらしいんですよ。ある時たまたま佐々木課長が給湯室に立ち寄ったらしいんですけどそこで見てしまったらしいんですよ。美女の部下が湯飲みに少しのお茶と雑巾の汁をしぼって入れているのを。その時佐々木課長は聞いたらしいんですよ。美女の部下が『佐々木課長の寿命よ縮まれ！　サルビチョフ！』と言ってたのを。それ以来佐々木課長は美女の部下の入れたお茶は怖くて飲めないらしいです。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第１６話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「いくじつか前彼女の強い提案で修行に行ったんですよ。まず初めに滝にうたれることになったんですよ。彼女が僕に言うんですよ……『百数えたら滝の下から出て来ていいわよ』って。時期が真冬だったんで死ぬかと思いましたよ。僕はなんとか百数えて滝から出たんですよ。そしたら彼女は憤どうって言うんですよ……『百は百でも百万よ』って。僕は彼女に泣きながら頼み込んでなんとか千にしてもらったんですよ。本当に過酷でした。次に寺の中で正座して目をつむり動かない、動いたら住職に肩を棒で叩かれるという修行をしたのですが、僕は動いていないのにバシバシ何度も顔を叩かれるんですよ。その時声が聞こえてきたんですよ……『豚野郎、幸せでしょう！　もっとしばいてあげるわ』って。僕は怖くなって目を開けたんですよ。そしたら案の定、僕の恋人が棒を振り回してたんですよ。僕はボロボロになったんですけどその後小部屋で精進料理を食べたんですよ。質素だけど割りと美味しかったんですよ。僕が彼女の方を見たら彼女が美味しそうに食べてるんですよ……分厚い肉汁滴るステーキを。他にもフォアグラやキャビア、フカヒレのスープを食してたんですよ。そしたら彼女は幸せそうな顔で言うんですよ……『私も精進料理を食べたかったわ』って。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第17話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前彼女と遊園地に行ったんです。そしたら彼女を見失ってしまったんですよ。辺りを探してたら犬の着ぐるみを着たマスコットキャラが近づいて来て握手を求められたんですよ。だから握手をしたら凄い握力で僕の手を潰そうとしたんですよ。僕は記念に犬のマスコットキャラをカメラで撮影しようとしたらそのマスコットキャラに右手の人差し指と中指で目をつかれたんですよ。大変痛かったんですよ。僕はそのマスコットキャラが怖くなって走って逃げ出したんですよ。ある程度走って大丈夫だろうと思ったら肩を叩かれたんですよ。振り向くと笑顔の犬のマスコットキャラが立ってたんですよ。僕は彼女に助けを求めようと彼女の携帯電話に電話したんですよ。すると犬のマスコットキャラが持っていたショルダーバックから着信音が聞こえてきたんですよ。そして犬のマスコットキャラが電話に出て言うんですよ……『豚野郎、ばれたらつまらないじゃない！　罰を与えるわ』って。その後は彼女を背負って家に帰りました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第１８話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前また、動物園に行ってきたんですよ。ライオンをおりの外から見てたら恋人が言うんですよ……『ライオンに豚肉をやるわよ』って。僕は辺りを見回して豚肉はどこにあるんだろうと思ったんですよ。そしたら彼女は僕の指をライオンのおりの隙間に入れて言うんですよ……『ライオンよ、豚肉をたーんと召し上がれ』って。なんとか彼女に許しをもらってことなきをえました。次にウサギと触れ合えるコーナーでウサギと遊んでいたんですよ。そしたら彼女が飼育員さんに言ってたんですよ……『ウサギと豚を交換してくれない』って。飼育員さんは『豚はどこですか？』って聞いたんですよ。そしたら彼女は僕を指さしてたんですよ。僕は恋人に『見捨てないでください、ご主人様』って泣き付いて説得したんですよ。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第１９話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「数日前『M男同盟』の会合にまた行ってきたんですよ。そこで佐々木課長と話したんですよ。佐々木課長は会社で課長さんをしているらしいんですけど部下の美女に虐められてるそうなんですよ。佐々木課長が部下の美女にコピーを頼んだらしいんですよ。そしたら部下の美女が佐々木課長にコピーした用紙を渡したんですよ。その用紙を見て佐々木課長は驚いたらしいんですよ。なぜならコピーした用紙がみんな女の裸体を写してたらしいんですよ。佐々木課長はそれ以来コピーは自分で行くそうです。またあるとき佐々木課長が部下の美女に課を代表して話すスピーチの文章の作成を頼んだそうなんですよ。それから一時間ぐらいしたら美女がスピーチ文の用紙を渡しながらいったそうなんですよ……『今までで最高の出来です』と。だから安心してその文章を佐々木課長が黙読したらしいんですよ。そしたら佐々木課長が驚いたらしいんですよ。どうしてかというとその文章はこんな感じだったらしいんですよ……『奥さんが三人の男性と浮気をしていますよ。名前は平谷徹、御手洗哲、菅野誠一です』と。それから佐々木課長は妻に詰問して本当だということが分かったらしいです。またまたあるとき佐々木課長が部下の美女を食事に誘ったらしいんですよ。居酒屋で二人飲んでいたら奥さんがやって来て佐々木課長に言ったらしいんですよ……『匿名の電話が入ったの！　あなたがこの居酒屋で不倫してるって！』って。そして奥さんは怒って帰ったらしいんですよ。その問答を静観していた部下の美女は佐々木課長に言ったらしいんですよ……『すいません、口がすべって奥さんに電話してしまいました』って。佐々木課長は部下の美女を大変恐れているらしいですよ。傾聴していただき

ありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

〔おしまい〕

第２０話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「数日前『M男同盟』の会合にまたまた行ってきたんですよ。そこで若いのに専務をしている滝田さんと出会ったんですよ。彼はよく奥さんに顔に落書きをされるそうなんですよ。数日前にも顔中に山や川の風景画を油性ペンで書かれたらしいんですよ。滝田専務はもう落書きされるのに慣れたらしくて落書きされても平然と出社されるそうなんですよ。会社の従業員も慣れてなんともないそうなんですよ。でも滝田専務は困る時があるらしいんですよ。その時は奥さんにお願いするらしいんですよ……『ご主人様、裸体画を顔に描くのだけは勘弁してください』と。すると奥さんは言ったらしいんですよ……『私の芸術を批判するの？』って。それ以来奥さんは怒って裸体画ばかり描くので滝田専務は毎朝必死に落書きを落とせるだけ落として会社に行くそうです。最近滝田専務は奥さんのたってない希望で嫌々スキンヘッドにしたそうです。なんでも奥さんが『もっと大きなキャンバスが欲しい』と言ったからだそうです。滝田専務はスキンヘッドにして以来夜泣きながら眠るそうです。明日は変な落書きがされてませんようにと願いながら。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第２１話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「数日前『M男同盟』の会合にまた行ってきたんですよ。そこで佐藤部長と出会ったんですよ。なんでも佐藤部長の奥さんはだいの甘党らしいんですよ。佐藤部長が辛口のカレーのルーを買って帰ったらしいんですよ。そしたら奥さんがカレーを作ってくれたらしいんですよ。食べてみるとカレーじゃなくてあめーだったらしいんですよ。佐藤部長がキムチを買って帰って食べてみたらハチミツの味が大半でキムチを食べた気がしなかったそうなんですよ。佐藤部長はついに怒って言ったらしいんですよ……『辛い物を食べさせてください。一生のお願いです』と。そしたら奥さんが笑って言ったらしいんですよ……『この世には甘い食べ物以外必要ないわ。辛い物なんて絶対許せないわ』って。佐藤部長が朝起きてみたら甘い味が口の中からしたらしいんですよ。吐き出してみたらハチミツだったらしいんですよ。奥さんにそのことを話したら言われたらしいんですよ……『五年前から寝ているあなたに飲ませていたわ。寝ているときも甘い物が必要でしょう』と。でも奥さんは就寝中は甘い物は食べなかったらしいんですよ。佐藤部長は何故自分の歯が虫歯だらけかようやく分かったらしいんですよ。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第２２話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前恋人とイノシシ狩りに行ったんですよ。二人で山の中に入ったら早くも彼女が言うんですよ……『獲物を見つけたわ』って。それを聞いて辺りを見回したんですけど何も居なかったんですよ。そしたら彼女が銃口を僕の額につけ、言うんですよ……『豚を見つけたわ』って。僕は怖くなって逃げ出しました。またあるとき二人でルアーで魚釣りをしてたんですよ。でも全然釣れなくて彼女が怒って言ったんですよ……『ルアーは止めて餌で釣ることにするわ』って。そして彼女が僕に手を差し出して言うんですよ……『豚野郎、豚肉を分けてちょうだい』って。だから僕は言ったんですよ……『自分はアンパ〇マンじゃありません。それだけは勘弁してください。ご主人様』って。そしたら恋人が『豚野郎、泳いで捕まえてきなさい』って言うんですよ。仕方なくパンツ一枚で川の中に潜り二時間かけて魚を一匹捕まえました。時期が冬だったので死ぬかと思いました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第２３話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「数日前彼女の誘いで料亭に行ったんですよ。僕が彼女に『おごってくれてありがとうございます。ご主人様』って言ったら彼女が満足そうに言うんですよ……『豚野郎、屍に三度なりなさい』って。しばらく椅子に座っていたら料理が運ばれてきたんですよ。海老の生け作りやチャーハンやフカヒレ等が。僕はワーイと喜んだんですけど高級料理は彼女の前だけで僕の前にはご飯とたくあんだけだったんですよ。僕は彼女が羨ましいなあと思いながらご飯をしかたなく食べてたんですよ。そしたら彼女が店員を呼び言ったんですよ……『いきのいい豚を調理してほしいんだけど』って。僕は嫌な予感がしたんですよ。そしたら案の定彼女が僕を指差して言うんですよ……『この豚よ』って。僕は『ご主人様、お許しください』って何度も言って勘弁してもらいました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第２４話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「彼女と同じベットで寝てたんですよ。僕はうっつらうっつらしてたら肩を叩かれたんで彼女の方に顔を向けたんですよ。そしたら彼女にしばかれたんですよ。痛かったんですよ。でも彼女は目をつぶってたんで僕が彼女の頬を手で撫でたんですよ。そしたらスッポンみたいに指に噛み付いたんですよ。彼女は寝言を言ったんですよ……『豚の分際でご主人様に触れるな』って。僕はベットの上で土下座して謝ったんですよ。そしたら彼女は寝言で右足を差し出して言うんですよ……『豚野郎、私の足の裏をなめなさい』って。仕方なく僕は彼女の足の裏をなめました。僕は彼女の寝相は凄いなと思ってたら彼女が笑い出したんですよ。彼女は『豚野郎、私は起きてるわよ』って言ったんですよ。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第２５話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前僕は夜景が見える高層のレストランに彼女を誘ったんですよ。夜景を見て僕が彼女に言ったんですよ……『綺麗な夜景だね、でも君の方が何倍も素敵だよ』って。そしたら彼女は照れて言うんですよ……『豚野郎、豚の丸焼きにしてあげようか？』って。そして豪勢な料理を食べて彼女は幸せそうな顔で言うんですよ……『豚野郎、踏んであげようか？』って。僕は二度踏んでもらいました。食事を食べ終えた後彼女に僕がプレゼントを渡したんですよ。彼女が包装を取り蓋を開けたんですよ。彼女は箱の中から指輪を取り出し笑顔で言ったんですよ……『豚野郎、ひざまづきなさい』って。僕はひざまづいて言ったんですよ……『僕と結婚してください』と。そしたら彼女は了承してくれたみたいで彼女が言うんですよ……『豚野郎、永遠に私につかえなさい』って。僕たちは結婚しました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第２６話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この間妻とモデルハウスを見に行ってきたんですよ。案内係の人に導かれて家の中を見て回ったんですよ。しっかりした家だったんで『ここなら子育て出来そうだね』って言ったら、妻は『豚野郎、誰と交尾するの？』って言われたんですよ。凄くショックだったんですよ。妻が案内係の人に聞いたんですよ……『豚小屋はどこ？』って。案内係の人が驚いて聞いたんですよ……『豚を飼われてるんですか？』って。そしたら彼女は僕を指差して言うんですよ……『この豚よ。非常食なの』って。僕達はその家を買ってゲス野郎（愛犬）を入れて三人で住んでいます。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

〔おしまい〕

第27話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前妻と映画を見に行ってきたんですよ。ラブロマンスものだったんで僕はついつい寝てしまったんですよ。すると妻が耳元で囁いたんですよ。僕はその言葉を聞いて目がはっきり覚めたんですよ。なんて言ったかはご想像にお任せします。そして映画が進んで主人公がヒロインに呟いたんですよ……『僕は死んでも君を大切に思っているよ』って。妻は僕を見てため息をついたんですよ。だから僕も妻に小声で言ったんですよ……『僕は死んでも君を大切に思っているよ』って。そしたら照れた妻が言うんですよ……『豚野郎、五体不満足にしてあげよか』って。それから映画が進んでラストシーンになったんですよ。戦争で離れ離れになって三十年という年月が過ぎて主人公とヒロインは偶然街で出会うんですよ。二人は抱き合ってキスをかわし言うんですよ……『二度と君を離さない』って。僕もその真似をして隣の席の妻にキスを迫りながら言ったんですよ……『二度と君を離さない』って。そしたら妻は人差し指と中指で僕の目をおもいっきり突いて言うんですよ……『豚野郎、豚の分際で生意気よ』って。それから僕は泣いていました。映画のためではなく目を突かれて痛かったから。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第２８話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前妻の機嫌が大変悪かったんですよ。その日は妻が料理をする日だったんですよ。妻が『ご飯が出来たわよ』って言うんでテーブルに行ったんです。そしたら僕の席の前にお皿にのった生の豚肉があったんですよ。ご機嫌ななめな妻は言うんですよ……『豚野郎、今日は共食いね』って。仕方ないので僕がその豚肉を使って肉じゃがを作って二人で食べたんですよ。妻は不機嫌な顔で『豚野郎、肉じゃがの味が薄いでしょう』と言いながら僕の肉じゃがに大量のケチャップをかけたんですよ。僕は仕方なくその肉じゃがを食べました。目が飛び出る程甘かったです。それからしばらく二人でテレビを見てたんですよ。妻はバーゲンセールの牛肉が売り切れで買えなくて機嫌が悪かったらしいんですよ。その後寝室に行ったんです。そしたらベットの横に藁が敷いてあったんですよ。妻は藁を指差して言うんですよ……『豚野郎、今日は豚らしく藁の上で寝なさい』って。冬だったんでとても寒かったです。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第２９話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「数日前、ホラー作品のビデオを借りてきたんですよ。妻と二人で見てたら、僕が怖くなって妻の手を握ったんですよ。そしたら妻が言うんですよ……『豚野郎、明日警察署に連れて行くわよ』って。だからしょうがなく妻の手を離しました。それから映画が進んで蝋人形が笑いだしたんですよ。僕は恐怖の余り妻に抱き着いたんですよ。そしたら妻が『逮捕されたいの？』って言うんですよ。だから恐ろしくなって妻から僕は離れました。逮捕されたくなかったので。ラストシーンで主人公が蝋人形だらけの町からヒロインを助けだして終わったんですよ。僕が妻に『怖かったけど面白かったね』って言ったけど反応がないんですよ。妻の顔をよく見ると寝てたんですよ。だから僕が座っている妻をお姫様抱っこして寝室に運んだんですよ。そしたら妻がベットの上で寝言を言ったんですよ……『豚野郎を蝋人形にしたいわ』って。僕は蝋人形にされるんじゃないかと思ってなかなか寝付けませんでした。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第３０話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前妻と二人でベランダから夜空を見てたんですよ。僕が『美しい夜空だね』って言ったら妻が『二心を抱くつもりなの！』って怒るんですよ。僕が『ご主人様はあなただけです』って弁解したら妻は言ったんですよ……『豚野郎、主君は誰か覚えておきなさい』って。それからも空を見ていたら流れ星が一瞬見えたんですよ。僕は願い事をしました。僕は妻に聞いたんですよ……『流れ星に何をお願いしたの？』って。そしたら妻は『豚野郎の願い事を先に言ったら教えるわ』と言うんですよ。だから僕が『願い事は僕達二人が末永く幸せにいられますようにだよ』って言ったんですよ。そしたら妻は『豚野郎、良い心がけよ。これからも精進しなさい』と言いました。僕が流れ星に妻が何を願ったのか聞いたら言うんですよ……『豚野郎、ご主人様の本音が聞けるのはあなたが死ぬ前だけよ。それでも聞きたいの？』って。僕は恐ろしくなって聞くのを止めました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第３１話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この間、朝腹痛を覚えてトイレに行ったんですよ。そしたら妻がトイレに入ってたんですよ。僕が『なるべく早めに代わって』って言ったら妻は言うんですよ……『代わってほしかったら誠意を表しなさい』って。どうしゆうもなくて僕は土下座して言いました……『ご主人様の事を敬愛しております。ご主人様のためなら火の中だろうと水の中だろうと飛び込みます。僕はご主人様のために人生を捧げて尽くします』と。そしたら便所の中から水を流す音が聞こえたので交代してくれるのかなと思ってホッとしたら妻は言うんですよ……『豚野郎、私の事を褒めたたえたら出てあげるわ』って。だから僕は冷や汗を流しながら言いました……『ご主人様は賢く勇敢で美しく何人もご主人様を凌駕する存在はいません。ご主人様の長所はあまたあれど短所は極めて少ない優れた人徳者です。いずれは世界を手にしても可笑しくない器量の持ち主です』と。すると妻は聞くんですよ……『後何分我慢できそう？』って。僕は腹痛に耐えながら『後五分が限度です』と言ったら妻は『後六分待ちなさい』って言うんですよ。僕はこれは代わってもらえないと思い内股になりながらも近所の公園の便所に駆け込みことなきをえました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第３２話（※注意・下ネタ）（前書き）

今回は下ネタです。苦手な方はご遠慮ください。

第３２話（※注意・下ネタ）

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前、妻と寝室のベットで寝てたんですよ。妻は寝息をたててたんでチャンスだと思い妻の胸を服ごしに触ったんですよ。意外に大きいなあと思ってたら往復ビンタをくらって腹に蹴りをいれられたんですよ。痛くて呻いてたら妻がムクッと起き上がって言うんですよ……『豚野郎、性犯罪者として牢屋に入りたいの？』って。僕が『気の迷いです。すいませんでした。ご主人様』と言うと、妻は『罰を与えるわ。自分の事を罵りなさい！』と言うんですよ。だから僕が『自分は色狂いの下品な豚野郎です。ご主人様の広大な慈悲のお心使いのお陰で生きている下等な輩です。何の才徳もなくご主人様と比較すると魚と龍、或いは蝶と鳳凰です。勿論ご主人様が龍と鳳凰です。ダメダメな自分に多大な恩恵をくださり大変感謝しています。先程は不意打ちをして申し訳ありませんでした』と言いながら床で土下座しました。すると妻は笑って言いました……『豚野郎、改心の心がけがあるのなら貢ぎ物を渡しなさい』って。仕方なく僕は自分の財布を差し出しました。でも中身を見た妻は『足りないわ』と言ったんですよ。後日、妻に高級な指輪を買ってあげてお許しをいただきました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第３３話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「この前妻とハイキングに行ったんですよ。気持ち良く山を登っていたら茂みから丸々としたイノシシが現れたんですよ。僕は一目散に逃げようとしたら妻が言うんですよ……『豚野郎、対決よ。豚対イノシシ見物だわ』って。妻は僕を盾にして後ろに隠れながら僕の背中を押してイノシシに近づけるんですよ。僕は怖くて、足がガタガタ震えてたんですよ。するとイノシシがゆっくり近づいてくるんですよ。僕はやけくそで『ガオー！　食べちゃうぞー！』って言ったんですよ。そしたらなんとイノシシが走り去ったんですよ。僕がホッとしてたら妻が言うんですよ……『イノシシに勝ったご褒美に踏んであげるわ』って。だから頭を三回踏んでもらいました。そのハイキングの帰り道の事なんですけど草むらから二匹のイノシシが姿を現したんですよ。かなり怒ってるようだったんですよ。僕と妻は一斉に逃げ出しました。僕が追いかけてこないかなあと思って走りながら振り返ったら片方のイノシシがもう一匹に頭を踏まれてたんですよ。僕は踏まれてるイノシシに親近感を覚えました。踏まれてるイノシシが同じ人間だったら親友になれそうだなと思いました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第３４話

舞台にライトがついた。舞台には女が一人立っていた。彼女は一礼すると話し始めた。

「はじめまして、豚野郎の妻よ。今日は便秘で苦しんでいる豚野郎の代わりに私が話すとするわ。この前、豚野郎と晩御飯を買いにショッピングセンターに行ったの。商品を品定めしていたら豚野郎が甘えた表情でいたぶってほしそうに訴えてくるの。だから私は豚野郎に言ってあげたの……「踏んであげるからひざまづきなさい」って。豚野郎は微笑をたたえながらひざまづいたわ。だから私は三度豚野郎の頭を踏んであげたの。また、レジでお会計をしていたら豚野郎ったら罵ってほしそうな顔で私を見つめるの。だから私はご希望通り言ってあげたわ……「豚野郎、ひざまづき生き恥をさらしなさい！」って。お客さん達の視線がひざまづいている豚野郎に集まってたわ。豚野郎ったら他人に奇異の目で見られるのが大好きなのね。彼ったら泣いてたわ。傾聴していただきありがとう」

女は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

第３５話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「以前妻と二人でショッピングセンターに買い物に行ったんですよ。ショッピングを終え外へ出てみるとザーザーと勢いよく雨が降ってたんですよ。傘は妻しか持って来ていなかったんで僕が頼んだんですよ……「一緒に僕を傘に入れてください、ご主人様」って。そしたら妻は言うんですよ……「豚野郎、豚らしく四つん這いで帰るんだったら傘に入れてあげるわ」って。僕は仕方なく四つん這いになったんですよ。それで相合い傘で家に帰ってたら妻が言うんですよ……「豚野郎、立ち上がりなさい」って。だから僕は立っていいんだと喜んで立ち上がったんですよ。すると車が水をはねて僕は全身びしょ濡れになったんですよ。妻はどうも僕を盾にしたかったようなんですよ。その後はまた四つん這いで帰宅しました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

〔おしまい〕

第３６話

舞台にライトがついた。舞台には男が一人立っていた。彼は一礼すると話し始めた。

「数日前会社に出勤する際に妻が言うんですよ……『お別れの挨拶は？』って。僕はキスの事だなと思って接吻を迫ったんですよ。すると妻は右足を差し出して言うんですよ……『口にさせてもらえると本当に思ってるの？　足にキスしなさい』って。だから渋々妻の足にキスをしました。それから会社で働いてお昼になったんで珍しく妻が作ってくれたお弁当を開いたんですよ。そしたら中には五百円玉がテープで張り付けられていて手紙が入っててて書かれてたんですよ……『新聞が面白かったから時間がなかったの。五百円玉で何か買いなさい』って。仕事が終わって自宅に帰ったら妻が玄関にいて言うんですよ……『ただいまの挨拶は？』って。僕は黙って妻の足にキスしました。傾聴していただきありがとうございました」

男は檀上から一礼した。拍手が起こる。するとライトが消え上から幕が降りてきた。

{おしまい}

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5193t/

「豚野郎」と呼ばれた男の物語

2011年10月9日21時55分発行